

Title	『フフ・トグ』（Köke tu γ）紙研究の重要性
Author(s)	娜仁格日勒
Citation	大阪大学中国文化フォーラム・ディスカッション ペーパー. 2017-2 p.1-p.18
Issue Date	2017-10-25
oa:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/66579
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University



**Osaka University
Forum on China**

Discussion
Papers
in
Contemporary
China
Studies

No.2017-2

『フフ・トグ』（Köke tuy）紙研究の重要性 （《青旗》（Köke tuy）報研究的重要性）

ナランゲレル（娜仁格日勒）

『フフ・トグ』（Köke tuy）紙研究の重要性^{*}

（《青旗》（Köke tuy）报研究的重要性）

2017 年 10 月 25 日

ナランゲレル（娜仁格日勒）[†]

^{*} 本稿は 2017 年 8 月に大阪大学で開催された第十回国際セミナー「現代中国と東アジアの新環境：史料・認識・対話」での提出論文を改編したものである。

[†] 中国・内モンゴル大学外国語学院教授

はじめに

ここでは、『フフ・トグ』（Köke tuy）紙の名前と概況について簡潔にまとめる。

（１）なぜこの名に？

フフ・トグ（Köke tuy）は青い旗との意。当該新聞はなぜこの名にしたかについて、『フフ・トグ』第12号2面（1941年6月7日）にハフンガー¹の寄せた文章「青きモンゴルを繁栄させる青旗」を掲載し、青色および青い旗はモンゴルの繁栄の歴史と緊密な関係を有してきたと述べ、具体的に5点を展開した。その一部を引用しておく。

一、モンゴルの大思想家インジャンナシ²の『フフ・ソドル』のなかに、青きモンゴルと多く使った。

二、13世紀のチンギス・ハーン時代に、中央アジアとヨーロッパに派遣したモンゴルの使者のことを記した当時の歴史書が『青旗』との名称であった。

三、民国15年、張家口で設立した内モンゴル人民革命党³の党旗は青い旗である。

四、満洲事変が勃発した直後、ガンジョルジャブ（現在、興安軍官学校長）の創設した内モンゴル自治軍⁴も軍旗を青い旗にした。そのとき、私自身もその活動に終始参加し、軍歌を創作した。後に、この歌は広く知られ、歌詞が「青い旗を掲げて」という冒頭から始まるため、「青旗の歌」と名づけられ、定着した。

五、徳王の政権「蒙古聯盟自治政府」も青旗をシンボルにして掲げた。

最後に、ハフンガーはぜひインジャンナシの『フフ・ソドル』とこの『フフ・トグ』紙を読むようモンゴル人に呼びかけている。

ハフンガーがまとめたように、モンゴル人は古来、天を崇拝するため、天の色の青色を尊び、民族のシンボル色としてきた。

（２）『フフ・トグ』紙の概況

『フフ・トグ』は新京の東三馬路23号に設立された新聞社である青旗報社⁵が発行した新聞紙で、

¹ 1908-1970、ジリム盟（現通遼市）ホルチン左翼中旗の出身。1941年から満洲国駐日本外交官として東京に勤務、日本の撤退後、共産党に協力し、1947年5月1日にウランホト(烏蘭浩特)で内モンゴル自治政府が成立した際、自治政府の副主席（ウランフーが主席）に当選したが、文化大革命中に殺害される。

² インジャンナシ（1837-1892）、幼名ハスチョロー、漢名宝衡山、チンギス・ハーンの第28代後裔。東モンゴルのジョソト盟トゥメト旗（現在遼寧省朝陽県北票市）出身の著名な作家で思想家、翻訳家である。その歴史小説『フフ・ソドル』（Köke sudur、青史演義、漢名の全称は大元盛世青史演義、全69回）の一部を『フフ・トグ』紙が第23号から最終号の178号まで、紙面を割り当て、連載した。

³ 1925年10月にメルセー（郭道甫）ら青年政治活動家によって結成された。

⁴ 最初はモンゴル独立軍と名乗った。

⁵ 1940年12月設立、社長菊竹実蔵。青旗報社は新京の東三馬路23号（写真1）にあり、新聞社の発行処（通信処）は永長路124号であった（写真2）。

1941年1月6日から1945年7月23日まで全178号がある。満洲国時代における発行時間最長のモンゴル語新聞であり、モンゴル近代史上のもっとも重要な定期刊行物の一つである。第1号-88号（1943年1月3日）は全8面、A2サイズであり、第89号（1943年1月13日）-178号までは第124号（1944年1月3日、全8面）を除き、全4面に改版したが、サイズはA2に変わりがなかった。第75号（1942年8月22日）までは週刊、第76号（1942年9月3日）以降は旬刊になった。発行責任者は創刊号から第4号までは窪野隆男（kubono takao）¹で、第5-103号はBadaraquと記しているが、第104号からは明記していない（写真1、3）。

また、『フフ・トグ』紙第116号（1943年10月13日）の記載によると、興安総省の設立にともない、1943年10月1日、興安（王爺廟、現在ウランホト）に青旗報社の支社を設けた。

該紙の位置づけ：満洲国政府（興安局）、蒙民厚生会、蒙民裕生会が共同で出資して、青旗社を設立し、『フフ・トグ』紙を発行したと、該紙の「創刊のことば」のなかで述べている（1941年1月6日）。これによると、政府と民間機構（財団法人蒙民厚生会と蒙民裕生会）の共同経営であると理解できる。そして、政府の政策等の宣伝およびモンゴル民衆の文化向上（科学知識、近代思想と新しい価値観の普及）を目指すといった目的が紙面の内容からも容

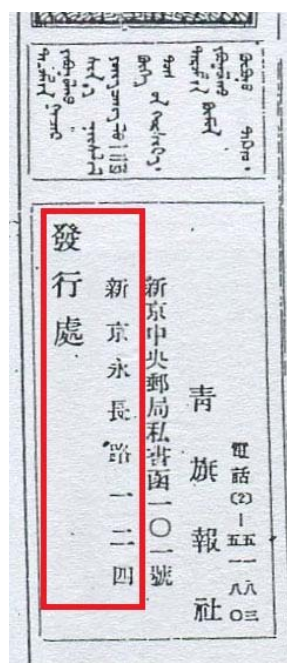


写真2 青旗発行処

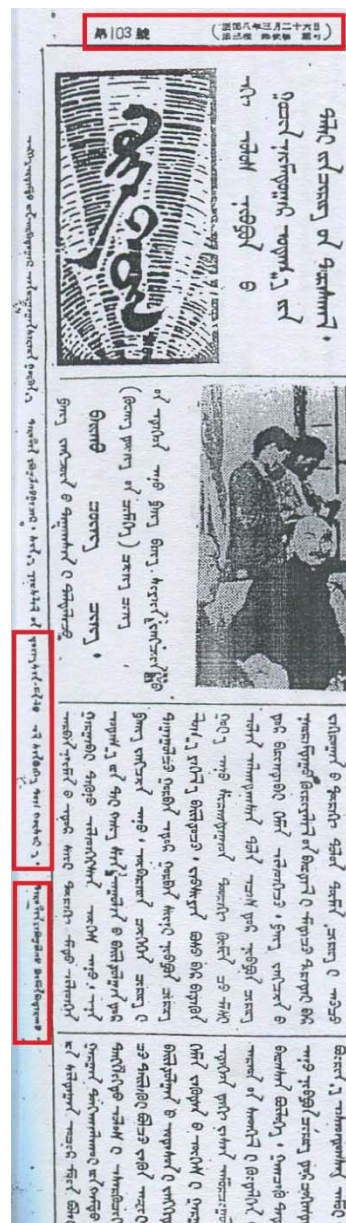


写真1 青旗103号1面

易に分かる。『フフ・トグ』の理念は「モンゴル民族全体の振興と精神文化の発展」である（創刊のことば）。当該紙は学校、興安総省（各省）内外のモンゴル各旗の公署、そして満洲国以外では、「西部モンゴル、日本、北支、朝鮮」に配布された²と第34号6面に記している（1941年11月8日）。内容から見ると、政治以外に、たいいていは民衆の身近な物事を分かりやすいことばで表現している。

発行量は8000部であったと考えられる（1941年11月8日 第34号6面）。

¹ 新聞紙には kubono takao とモンゴル文字で表記しているが、広川は窪野隆男だとしている（広川1997）。

² 最初は無償であったのが戦況の悪化にともなう紙不足などによって、有料に変わった（内田2015）。

『フフ・トグ』の存在は20世紀80年代に知られ、その研究は90年代から始まった。『フフ・トグ』紙の所蔵およびいままでの研究成果についてのまとめは、トゥイメル（忒莫勒）2010、内田 2015、周太平 2016に詳しい。

つぎに、いままでの研究をふまえ、『フフ・トグ』紙研究の意義と重要性について検討してみたい。

1. 内モンゴル近代史研究の独特な史料

『フフ・トグ』は近代の内モンゴルにおいて発行時間最長のモンゴル文字の新聞紙として、その社会全体を網羅した豊富な内容と膨大な情報量が内モンゴル近代史研究にとって極めて貴重な価値を有する。

当該紙には、世界の政治情勢、満洲国内の情勢、満洲国内外とくに徳王政権域の西部内モンゴルも含めた内モンゴル全体の情勢、産業（モンゴル各地の牧畜情報、農業、牧畜産出物の加工方法など）、物産、習俗習慣（各地の祭り等）、宗教、健康と衛生、教育（家庭教育、近代学校教育、女子教育）、文学作品、近代啓蒙（近代的知識や思想の普及）、児童に関する内容（子育て知識、子供の家庭教育、児童向けの近代科学知識と実験、物語、民話など）、日本語モンゴル語会話、歴史小説の連載といったさまざまな分野の情報が含まれる。豊富な情報が内モンゴル近代史各分野の研究に確実な史料を提供してくれる。

世界や満洲国およびモンゴル各地域の情勢に関する記事のなかからは、時報ニュースなど社会全体にかかわる大きなできごとからある人物、人事異動といった具体的な情報まで非常に詳細な資料を得ることができる。アルヒーフ史料の閲覧制限などがきたした研究の不足を補うには『フフ・トグ』紙は独特の史料価値を有し、ユニークな役割を發揮できる。このような最近の研究には「モンゴルの統一と繁栄を祈って—徳王とマーニバダラの付き合い—」¹が一例として挙げられる。

2. 民族学研究領域における価値

現在、中国の人文社会科学研究費助成事業たる「国家社会科学基金」の分野分類には「民族問題研究」というのがあり、実際は狭義の民族問題を含んだ民族学領域である。この民族問題研究領域では、中国領内の少数民族にかかわる各種の問題を取りあつかい、関連する範囲がとても広い。なかでは、学術研究として、少数民族の言語と文化が直面している深刻な問題を取り上げる



写真3 青旗104号1面

¹ ナラソー（那日蘇、内モンゴル大学モンゴル歴史学部モンゴル近代史博士課程）「モンゴルの統一と繁栄を祈って—徳王とマーニバダラの付き合い—」二木博史、娜仁格日勒ほか主編『内陸アジア歴史文化研究』No2、内陸アジア歴史文化研究会、東京、2017。

ケースも多少ある。これは、まさに少数民族の言語とこの言語を媒体とする文化の存続が危うくなっている現状の一反映である。モンゴル人にとっていうと、類似の状況が満洲国とそれ以前の時代にも存在していた。取り囲む時代と社会体制などは異なるが、モンゴル族の置かれた立場と環境の深刻さと、これに対するモンゴル人として危機感を覚えていることには大きな違いはなからう。

『フフ・トグ』のほぼすべての号にモンゴル人の民族の誇り、自信、復興などに関連する論説、記事や寄稿が見られる。なかでも、とくにモンゴル語と文字をもっと使用するよう呼びかけているのが印象ぶかい。母語のモンゴル語を使用することは民族の自尊と自信につながると強調する文章が主として2、3、5、6面に掲載している。また、モンゴル語と文字使用の推進の一措置として、関係機関からモンゴル語辞書を作成するなどの方法も講じた¹。『フフ・トグ』紙はモンゴル文字の新聞として、当時では、モンゴル語の発信の最大の場となった。政府やそのほかの



写真4 青旗 17号3面 shidurgu
「忠誠、正義」との意味の文字を草、木、花、鳥などの形にした。

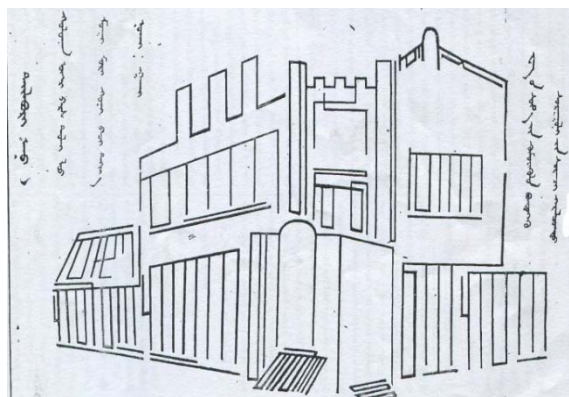


写真5 青旗 17号3面 十二支の名称を建物の形にした。

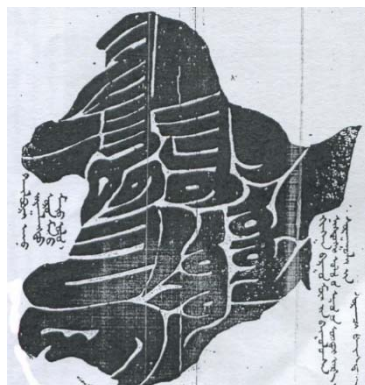


写真6 青旗 17号8面 「王道楽土たるわが満洲国」

関係者の政策と措置、呼びかけなど以外に、当該紙のもう一つの面白い試みが注目を引く。つまり、モンゴル文字を絵画の形にして

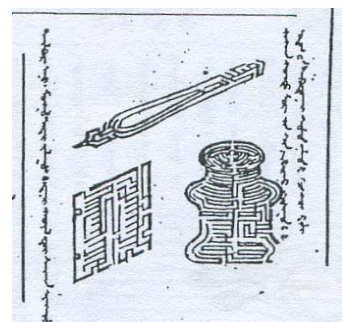


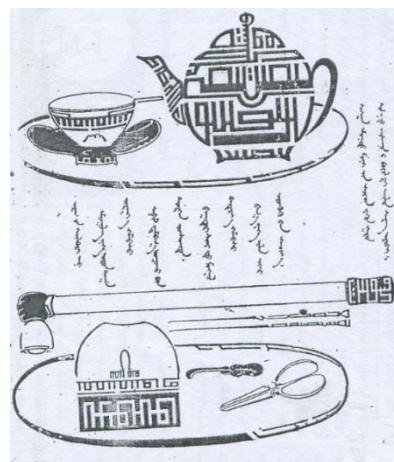
写真7 青旗 53号7面
「われらモンゴル青年よ、勉学に励もう」

たとえば、第17号3面、8面（写真4,5,6）、第53号7面（写真7）、第57号7面（写真10）などである。これは、とくに縮小される以前の8版のときに多くみられる。

民族の立ち遅れを認識し、昏睡状態から覚醒して、過去の輝く歴史を知り、貧困・無知・没落の現状を変え、民族の自尊と自信を感じながら復興・発展と近代化を目指すという啓蒙の意図が『フフ・トグ』の終始に貫いている。

¹ たとえば、『フフ・トグ』第27号から辞書の連載がある。

以上で述べた内容が民族学研究の素材になりうる。民族学（人類学）は民俗学と違って、風俗習慣だけでなく、民族の存亡にかかわる問題も研究してこそ意義がある。日本側の意図は何であろうと、モンゴル人側から見ると、『フフ・トグ』はモンゴル人の考え、要求、希望を母語で発信する重要なプラットフォームとなったことにはちがいない。民族学の視点からの『フフ・トグ』研究は独特で、きわめて重要な意義を持つはずである。



3. 教育学研究（教育史研究と教育方法学）

内モンゴルの近代学校教育が1902年の崇正学堂¹に始まるというのが一般的な見方である。このときから1949年の中華人民共和国成立までの半世紀近くの期間中に、1932-1945年の14年間を除くと、戦乱のため、内モンゴルでは近代学校教育がほぼ停滞状態であった。この14年間の内モンゴルの近代学校教育における価値の重要性はいうまでもない。中華人民共和国が成立した後、内モンゴルの学校教育は校舎、教員などのハードな面で満洲国時代の「遺産」を受け継いで行くしかないことも周知の事実である。『フフ・トグ』のモンゴル各旗の情勢についての記事には、新学校（小、中、高等学校）の設立、学生の募集、入学試験、教師の養成、各学校の学生人数と教師人数、カリキュラム、各種の統計データ、学校建設のための寄付（寄付者と金額）など、ときにはとても詳細な情報が記載されている。また、当該紙のなかに女子教育、家庭教育と関連する内容も少なからずみられる。近代モンゴル学校教育史を実証研究するには、『フフ・トグ』が重要な手がかりを提供できる。ちなみに、筆者は母校（中学校）が満洲国時代に設立されたことを『フフ・トグ』で初めて知った。校歌も載せてある。

写真10 青旗57号7面 平和な故郷で幸せに暮らすために、アヘンをすぐにやめよ。威厳のあるモンゴルが発展するには、老若みんなで自信を持つために。

教育方法学に関連した内容は、教師の教育、カリキュラム以外、教授法として絵画、写真を活用した特徴がとりわけ「児童青旗」欄に鮮明に出ている。

4. 言語学研究（モンゴル語近代語彙の形成）の視点

モンゴル人の近代化は主にロシアと日本の影響によって始まった。内モンゴルは日本の影響下、主として日本と日本語を通じて、近代の世界を認識しはじめた。それゆえ、モンゴル語の近代語彙のなかに、日本語から導入されたものが少なからず使われてきた。なかには、中国語と勘違いされた日本語もある。これに関しては、周太平前掲論文 2016 とフフバートル「モンゴル語の近代語彙と辞書（二）：蒙文学会翻訳『新名字典』（満洲国 1941 年）」に論述がある²。

¹ ジョソト盟カラチン右旗のグンサンノルブ（1872-1931）王が 1902 年に設立した、モンゴル族にとって初となる官立学校である。グンサンノルブは崇正学堂創立の翌年にまた女子学校の毓正女学堂と軍事学校の守正武学堂を作った。

² フフバートル「モンゴル語の近代語彙と辞書（二）—蒙文学会翻訳『新名字典』（満洲国 1941 年）」



写真8 青旗54号5面 二人三脚の右はイギリス、左はアメリカという字が見られる。



写真9 青旗54号8面「人口を増やし、栄えるアジアの建設に尽力しよう」

5. 新聞学研究

新聞史（ジャーナリズム/メディア史研究）と紙面設計（ページレイアウト）の視野から『フフ・トグ』についての新聞学研究ができる。絵、図、写真を用いて表現することは、とりわけ読み書きがまだ普及していない当時では特別に効果的である。一例を挙げると、第54号5面（写真8）には漫画で当時の敵対国イギリスとアメリカを風刺している。同8面（写真9）の絵は人口を増やすようモンゴル人に呼びかけている。このような絵画はほかにも多くある。毎号の最終頁は子ども向けであり、絵画や写真をより多く使っていることも、関係分野の研究資料となる。

モンゴル語定期刊行物研究の視点ではよく知られている内モンゴルのトゥイメル、セ・オットゴンバヤル、ノンダグラールの考察があり、関連情報は周太平前掲論文に紹介されている。日本では、広川と内田の研究¹等がある。

6. 文学研究

『フフ・トグ』に多くの文学作品が掲載されており、なかでは、とりわけ青年時代に日本留学し、後に内モンゴルを代表する著名な詩人となったナ・サインチョクト（サイチンガー）の作品が注目されてきた。1990年代のウ・ショガラー（元・内モンゴル師範大学教授）、バ・ゲレルトラの研究が最初であり、21世紀に入ってからオットゴンバヤル、永花らの研究がある。日本では、内田孝の研究があり、これに関しては内田2015にまとめられている。

—『学苑』No.859、昭和女子大学 2012-5。

¹ 広川佐保 1997、2007、2016。内田孝は最近、また満洲国時代のモンゴル語雑誌を新しく見つけた（「新発見の満洲国期モンゴル語定期刊行物『蒙文精軍』と『鉄騎』誌」『20世紀前半におけるモンゴル語定期刊行物研究』昭和女子大学国際文化研究所、2016）。

7. 植民地支配研究

「日本の遺産」、「植民地支配」について、中国ではやはり「抗日」、「反日」の立場で受け止める人が多い。しかし、学術は真実の掘り起こしに立脚しなければならない。日本の遺産を総合的に捉え、植民地経営の功罪を客観的に指摘することは、いままで、すれ違いを続けてきた関係者が共通認識に達成する前提である。

『フフ・トグ』各号には世界の政治情勢、満洲国内の情勢、満洲国内外のモンゴル各地域の情勢が報道され、とりわけ政府の政策宣伝、日本軍が各戦場で有利にあるなどの時勢の宣伝に多くの紙面を使った。また、宗主国として、植民地に支配者の言語を押し付けるのも一般的な統治策である。『フフ・トグ』に「日モ会話解説」欄を設けたのは為政者側の言語政策の現れである。また、軍隊に入るのが光栄であると宣伝し、兵士になるよう呼ぶかける内容も『フフ・トグ』にたくさん見られる。

モンゴル国が清朝から独立できた理由をジェブツンダンパ・ホトクトの宗教上の至上権威に求める見解がある。ジェブツンダンパ・ホトクトはモンゴル人のアイデンティティの基盤であるラマ教（正確にはチベット仏教）の指導者として、国家の独立達成に果たした役割がきわめて大きいことは、広く認められる。日本の支配時代、内モンゴルのラマ教の改革つまりラマ教の日本化を進めた。これについては広川とムーレンの研究がある¹。ここで、ひとつ強調したいのは、この改革に暴力が伴った資料はまだ見つかっておらず、また、満洲国時代に、ラマ教の寺院を故意に破壊した記載もないようだ。

産業の改革も『フフ・トグ』が宣伝する重要な内容のひとつである。この紙には「家畜欄」が設けられ、各地の牧畜の状況を紹介する以外、家畜産出物の近代的な加工法、家畜の飼育方法の改善、家畜品種の改良、伝統的な移動式遊牧の見直しなどの文章が多く掲載された。総括すると、牧畜は維持するが、近代的な改革が必要であると啓蒙している。

以上をまとめると、『フフ・トグ』は日本の内モンゴルに対するメディア戦略の一環であり、為政者の施策宣伝の道具であったが、モンゴル側の意見や主張も配慮し、ある程度受け入れたのも明白である。

8. 縦書き表音文字のデータベース構築の重要性と難しさ

大阪大学が2014年以来、『フフ・トグ』のデータベース構築と公開に取り組み、1941年分の記事索引を2017年7月に発行した。大阪大学の今回の試みが小言語で、縦書き表音文字のデータベース作成のため、経験を積み、成功の例を示したと、個人としては考えている。都馬バイカル氏をはじめとする桜美林大学、新潟産業大学のモンゴル人教師と留学生が『フフ・トグ』1941年分の詳細な目録をモンゴルの伝統文字（ウイグル式縦文字）で入力し、さらにローマ字転写と

¹ 広川 1997；ムーレン「日本支配時代における東部内モンゴルのラマ教の改革」、内モンゴル大学修士学位論文、2014年。

日本語訳をつけた。筆者はその日本語訳の点検作業に少しばかり加わるなかで、実際の作業を行ってきたかたがたの苦労を想像してみた。もっとも難しかったのがおそらくモンゴル文字の入力だろうと推測している。現在、モンゴルのウイグル式縦文字のソフトは数種が開発されているが、それぞれにいくらか問題があり、使用者に不便をもたらした。これはモンゴルの伝統の縦書き文字がIT時代で直面している難題である。大阪大学の今回の仕事は縦書き表音文字のデータベース作成の難しさを示すとともに、特色のあるものを構築したともいえる。今後は、この作業が継続していくことを願う。

おわりに

満洲国時代、日本の支配下に入った東部内モンゴルの人々はモンゴル社会の近代的啓蒙、文化の向上、産業の改革（牧畜の改良）を目指す同時に、植民地支配体制の許す範囲内でモンゴルの伝統と民族の利益を最大限に守ろうとした。『フフ・トグ』紙はまさにその目標を実現するために取られたさまざまな政策や措置およびその具体的な過程と成果を反映している。

『フフ・トグ』には内モンゴル西部の徳王政権域の情報もときどき見られる。しかも、新聞紙は東部に限らず、西部にも配布されていた。発行時間が長い、発行量が大きい、読みやすい、この新聞紙の内モンゴル社会全体に与えた影響はたいへん重要である。この意味において、『フフ・トグ』紙は当時の内モンゴル全域の社会状況を映し出す史料としての位置づけができ、内モンゴル近代史だけではなく、近代モンゴル・日本関係史、近代日中関係史、近代東アジア国際関係史の研究にも独特な価値を持つ。さらに一步進んで考えると、いわゆる「日本植民地支配の遺産」、そして現今の内モンゴルの実情を考えるうえでもその有する独自の意義を見逃してはならない。

参考文献

- 内田孝2002「内モンゴルの詩人サイチングの日本留学期における著作」『日本モンゴル学会紀要』第32号。
- 同上2004「大阪外国語大学におけるモンゴル人教師（1922-1950）」『内陸アジア史研究』第34号。
- 同上2008「近代内モンゴルにおける文学活動と表現意識」、大阪大学博士論文。
- 同上2015「内モンゴル近現代文学研究からみた『フフ・トグ』紙—モンゴル語定期刊行物の研究現況に言及しつつ」田中仁・堤一昭編『戦前期モンゴル語新聞『フフ・トグ（青旗）』デジタル化と公開の可能性—東洋文庫政治史資料研究班・研究セミナーの記録』OUFC BOOKLET Vol.7。
- 同上2016「新発見の満洲国期モンゴル語定期刊行物『蒙文精軍』と『鉄騎』誌」『20世紀前半におけるモンゴル語定期刊行物研究』昭和女子大学国際文化研究所。
- 周太平2016「内モンゴルにおける『フフ・トグ（青旗）』研究—満洲国における近代モンゴル新語研究を兼ねて—」田中仁・堤一昭編『戦前期モンゴル語新聞『フフ・トグ（青旗）』データベースの構築・公開に向けて』OUFC BOOKLET Vol.9,2016.3。
- ジャン・チョクト2016「満洲国期における東モンゴルの牧畜に関する考察」、内モンゴル大学修士学位論文。
- 田中仁・堤一昭編『戦前期モンゴル語新聞『フフ・トグ（青旗）』デジタル化と公開の可能性—東洋文庫政治史資料研究班・研究セミナーの記録』OUFC BOOKLET Vol.7,2015.3。

同上『戦前期モンゴル語新聞『フフ・トグ(青旗)』データベースの構築・公開に向けて』OUFC BOOKLET Vol.9,2016.3。

トゥイメル(忒莫勒)編著2010『内蒙古旧報刊考録1905—1949.9』、遠方出版社。

娜仁格日勒2012<《青旗》所見近代蒙古民族女子教育>、《内蒙古師範大学学报》(教育科学版)第9期。

同上2013<《青旗》(Köke tuy) : 珍貴的近代蒙古民族啓蒙思想文献>、*QUAESTIONES MONGOLORUM DISPUTATAE*.Vol.9。

同上2015「《青旗》報關於成吉思汗廟的記載」『戦前期モンゴル語新聞<フフ・トグ>のデジタル化と公開の可能性—東洋文庫政治史資料研究班・研究セミナーの記録』OUFC BOOKLET Vol.7。

ナリス2017「モンゴルの統一と繁栄を祈って—徳王とマーニバダラの付き合い—」二木博史、娜仁格日勒ほか主編『内陸アジア歴史文化研究』No2、内陸アジア歴史文化研究会、東京。

広川佐保1997「1940年代の日本の対内モンゴル政策と『フフ・トグ』紙」『日本モンゴル学会紀要』第28号。同上2007「満州国のモンゴル語定期刊行物の系譜とその発展」『環日本海研究年報』第14号。

同上2016「内モンゴルから見たハルハ・モンゴル」—『ムグデニー・モンゴル・セトグール(奉天蒙文報)』をもとに—」『20世紀前半におけるモンゴル語定期刊行物研究』、昭和女子大学国際文化研究所。

ムーレン2014「日本支配時代における東部内モンゴルのラマ教の改革」、内モンゴル大学修士学位論文。

序

首先简单介绍报纸名称《青旗》(Köke tuy)的由来以及报纸的概况。

首先,关于《青旗》(Köke tuy)名称的由来,该报第12期(1941年6月7日)第2版面刊登了哈丰阿¹题为《振兴蓝色蒙古的蓝色旗帜》的文章,论述了蓝色以及青旗(蓝色旗帜)与蒙古民族繁荣昌盛的历史的关系,并列举了5个例子。引用部分内容如下:

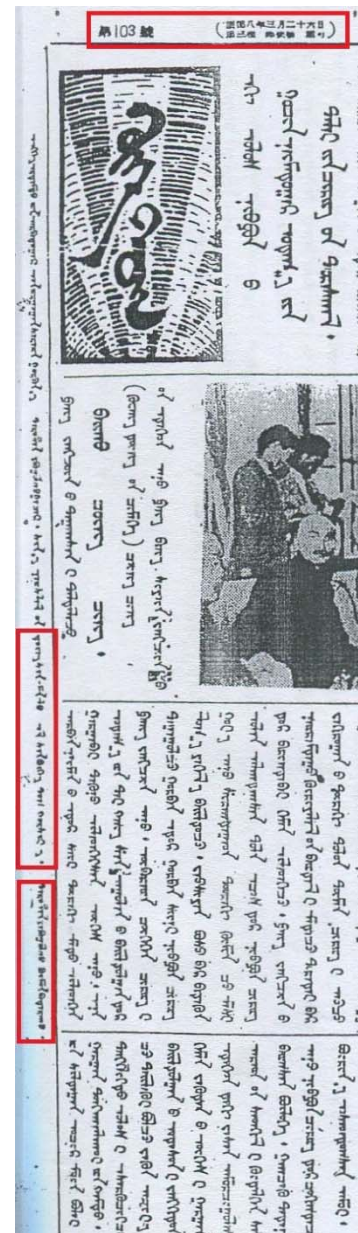
- 一,蒙古民族的大思想家尹湛纳希²的《青史演义》中,多处使用“蓝色蒙古”这一概念。
- 二,13世纪的成吉思汗时代,蒙古向中亚和欧洲派遣了使者,当时的欧洲史学者记载了这一情况,其资料名称为《青旗》。
- 三,民国15年,在张家口成立的内蒙古人民革命党³的党旗也是青旗。
- 四,“九·一八事变”爆发后,甘珠尔扎布(现任兴安军官学校校长)创立的内蒙古自治军⁴的军旗亦为蓝色的旗帜。那时,我也参与了这一活动,并创作了军歌,这一歌曲后来被广泛传唱,因歌曲由“高举青旗”开头,从而以“青旗之歌”的名称得以传播。
- 五,德王政权“蒙古联盟自治政府”也将青旗作为政府的象征。

在文章的最后,哈丰阿呼吁蒙古人一定要阅读尹湛纳希的《青史演义》和《青旗》报。

的确,正如哈丰阿所指出的那样,蒙古人自古以来崇拜天,从而也崇尚蓝色,并将蓝色作为民族的标志性颜色。

以下是《青旗》报的概况。

《青旗》由青旗报社⁵发行,创刊于1941年1月6日,至1945年7月23日止,共178期,是伪满时期发行时间最长的蒙古文报纸,因此,也



照片1 青旗 103期第1版

¹ 1908-1970, 哲里木盟(现在通辽市)科左中旗人,1941年起作为“满洲国”驻日本外交官在东京工作,日本战败后,与中国共产党合作,1947年5月1日内蒙古自治政府成立时当选为副主席,文化大革命中遭杀害。

² 尹湛纳希(1837-1892),乳名哈斯朝鲁,汉名宝衡山,成吉思汗第28代孙。卓索图盟吐默特(现在辽宁省朝阳市北票)人,著名作家、思想家、翻译家。《青旗》从第23期起一直到第178期无间断连载了其历史小说《青史演义》(Köke sudur, 全称《大元盛世青史演义》,共69回)的一部分。

³ 1925年10月,由墨尔色(郭道甫)等青年政治活动家创建。

⁴ 最初的名称为“蒙古独立军”。

⁵ 青旗报社于1940年12月成立,社长菊竹实藏,位于新京东三马路23号(照片1),其发行处(通信处)在永长路124号(照片2)。

是内蒙古近代史上最为重要的报刊之一。第1-88期（1943年1月3日），为对开8版，自89期（1943年1月13日）起改为对开4版（1944年1月3日发行的第124期为8版）。从第1期至1942年8月22日发行的第75期止大概为周刊，从第76期（1942年9月3日）到第178期（1945年7月23日）为旬刊。关于发行人，创刊号起到第4期是溹野隆男（KUBONO TAKAO）¹，第5期至第103期（1943年6月3日）为Badaraqu，从第104期起没有标明（照片1,3）。关于《青旗》所藏情况参见忒莫勒编著《内蒙古旧报刊考录1905—1949.9》（2010年）。

据《青旗》第116期（1943年0月1日）记载，随着兴安总省的设立，于1943年（康德10年）10月1日在兴安市（王爷庙，现乌兰浩特市）成立了青旗支社。

如何定位《青旗》报？创刊词中有如下表述：兴安局、蒙民厚生会和蒙民裕生会共同出资在新京创建了青旗报社并发行《青旗》报。由此可知，《青旗》由政府 and 民间机构共同经营。同时，纵观报纸的内容，大致为两部分，即政府的政策等的宣传和蒙古民众的文化向上（科学知识、近代思想以及新价值观的普及）。该报在创刊词中还强调，其理念为“蒙古民族风俗习惯的向上改善和文化发展”。

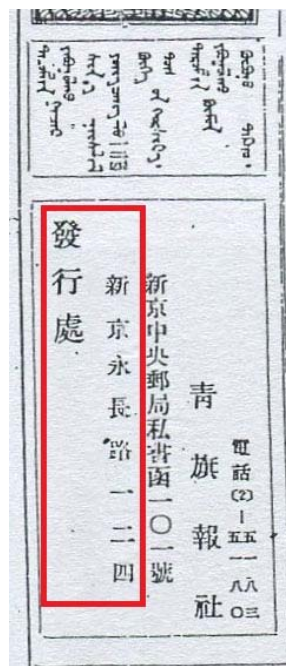
根据1941年11月8日发行的第34期第6版面的记载，报纸发行量大概在8,000份左右，无偿发放给学校、兴安总省内外的各蒙旗公署、“西部蒙古、日本、北支、朝鲜”²。包括政治、与民众日常生活密切相关的内容等，文字表述通俗易懂。

20世纪80年代《青旗》的存在被发现，其研究从90年代开始。关于该报的保存以及研究现状的概括可参考本文参考文献中的忒莫勒 2010、周太平 2016、内田孝 2015 等相关论文。

关于《青旗》研究的重要性，笔者将从如下几个方面进行梳理。

1，内蒙古近代史研究的独特史料

《青旗》作为近代内蒙古历史上发行时间最长的蒙文报纸，以其网罗整个社会的丰富内容和庞大



照片2 青旗通信处



照片3 青旗 104 期第 1 版

¹ 报纸标记为 kubono takao 的蒙文，广川佐保认为是溹野隆男（广川 1997）。

² 起初为无偿发放，后因战局恶化导致纸张不足等原因，变为收费（内田 2015）。

的信息量为内蒙古近代史研究提供了极为珍贵的史料。

该报包含世界形势、“满洲国”国内形势、“满洲国”内外的蒙古地区的形势、产业（蒙古各地的畜牧情况、农业、畜产品加工方法等）、物产、风俗习惯、宗教、健康与卫生、教育（家庭教育、近代学校教育、女子教育）、文学作品、近代启蒙（近代知识以及近代思想的普及）、与儿童相关的内容（育儿知识、儿童的家庭教育、面向儿童的近代科学知识实验、故事、民间传说等）、蒙日会话、历史小说的连载等内容。丰富的内涵为内蒙古近代史各领域的研究提供了重要史料。

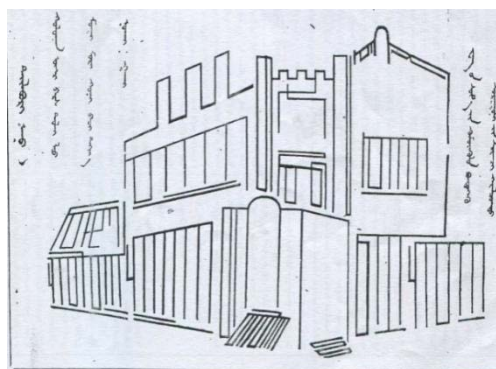
在关于世界以及“满洲国”、蒙古各地的形势的报道中，既有有关整个社会的宏观内容，也有关于某个人物或人事变动等细微的记载。在档案资料还没有完全开放的当下，《青旗》报可以提供独特的、具有极高价值的资料，弥补研究的欠缺。这样的尝试，近期有那日苏的论文“祈祷蒙古的统一与繁荣—德王和玛尼巴达拉的交往—”¹。

2，民族学研究方面的价值

中国的人文社科研究资助事业“国家社科基金”的学科分类中有“民族问题研究”一项，是包括狭义的民族问题研究的民族学领域。该领域研究中国境内的少数民族相关的各种问题，范围广泛。其中，有一些课题探讨少数民族的语言文化所面临的困境和问题，这当然是在当今时代弱小民族的语言文化所面临的严重问题的一个反映。

就蒙古人而言，在“满洲国”时期及以前也曾存在类似的情况。毋庸置疑，周边环境和所处的社会体制有着根本的区别，但是蒙古人所面临的问题以及他们对此产生的危机意识都是非常深刻的。

《青旗》的每一期都刊登有关于蒙古民族的自豪感、复兴振兴的文章，尤其是呼吁人们使用蒙古语和蒙古文的论说和报道更多。这些文章主要发表在第2、3、5、6版上。

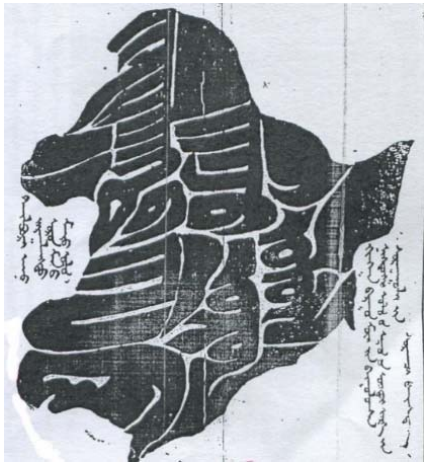


照片 5 青旗 17 期第 3 版 房屋的一部分表示十二属相的一个名称。

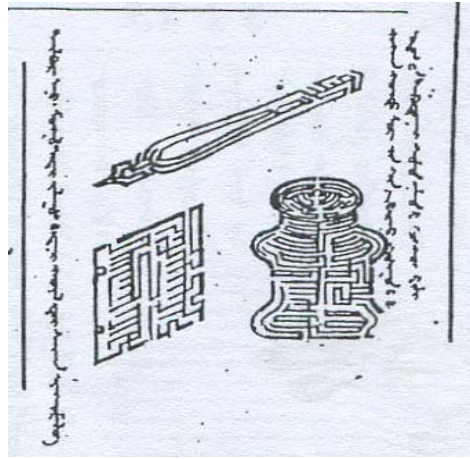


照片 4 青旗 17 期第 3 版 以鸟类、蝴蝶和花草组成表示“忠诚、正义”の蒙古文字 shidurgu

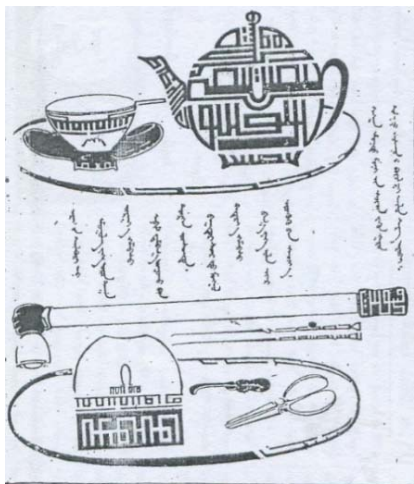
¹ 那日苏（内蒙古大学蒙古历史学系博士生）《祈祷蒙古的统一和繁荣—德王与玛尼巴达拉的交往—》，二木博史·娜仁格日勒等主编《内陆亚历史文化研究》No2，内陆亚历史文化研究会，东京，2017。



照片6 青旗 17 期第 8 版“王道乐土满洲国”



照片7 青旗 53 期第 7 版“我蒙古青年，一定要奋发图强”



照片10 青旗57期第7版 “为了在和平的家乡幸福地生活，必须立即戒掉鸦片。为建设富饶昌盛的蒙古而不懈奋斗”

当时的相关机构还编辑了蒙古语词典，作为推进蒙古语和蒙古文使用的一个措施¹。

《青旗》作为蒙古文报纸，成为了当时最大的使用蒙文的媒体平台。该报的一个有趣尝试引人注目，即将蒙古文字以绘画的形式加以表现。例如，第17 期3版、8版（照片4、5、6），第53 期7版（照片7），第57期7版（照片10）都刊登了这样的图画。这一特点尤其在缩小之前的8个版面时非常明显。

《青旗》报自始至终贯穿着认识民族的落后和无知，整个社会从昏睡状态中觉醒，为过去的辉煌历史感到骄傲的同时，为改变贫困、无知、没落的现状而奋斗的宗旨。

上述的这些内容都是民族学的好素材。民族学（人类学）不同于民俗学之处就在于，它不能仅仅研究风俗习惯，还必须研究关乎民族存亡的问题才能体现其价值和意义。虽然日本方面有其自己的意图，但是，从蒙古人角度来看，《青旗》无疑成为了反映蒙古人的观念和诉求的蒙古语文的重要平台。因此，《青旗》的民族学研究具有独特的意义。

《青旗》报自始至终贯穿着认识民族的落后和无知，整个社会从昏睡状态中觉醒，为过去的辉煌历史感到骄傲的同时，为改变贫困、无知、没落的现状而奋斗的宗旨。

3，教育学的价值

内蒙古的近代学校教育始于1902年的崇正学堂²，到1949年中华人民共和国成立的近半个世纪里，除了“满洲国”时期的14年外，由于战乱，几乎处于完全停滞状态。因此，这14年对于内蒙古的近代学校教育的重要性不言而喻。中华人民共和国成立后，内蒙古的学校教育在校舍、教师等方面只能利

¹ 例如，《青旗》从第 27 期开始连载的蒙古语词典。

² 卓索图盟喀喇沁右旗王贡桑诺尔布（1872-1931）于 1902 年创立的蒙古地区最初的官办新式学校。贡桑诺尔布其后还创办了女子学校毓正女学堂和军事学校守正武学堂。

用伪满时期的“遗产”也是众所周知的事实。《青旗》报有大量关于学校的记载，如新学校的建立、学生的募集和教师的招聘、入学考试、教师培训、各校师生人数、教学计划和课程安排、各种统计数据、新建学校的资金募集以及募捐者姓名和金额等。此外，还有很多关于女子教育、家庭教育的内容。

《青旗》可以为近代内蒙古学校教育史的实证研究提供重要的资料。顺便指出一点，根据《青旗》的报道，笔者的初中母校就是在“满洲国”时期建立的，该报还刊载了校歌。

教育史以外，还可以从教育方法学的视角研究《青旗》，比如，教师的培养和培训、教学计划和课程安排、作为教授法大量使用绘画和照片等特点。

4，语言学研究（近代蒙古语词汇的形成）

蒙古人的近代化主要是在俄罗斯和日本的直接影响下开始的。内蒙古在日本的影响下，通过日本和日语开始接触近代世界。因此，在近代蒙古语词汇中，有不少是从日语借用的。其中甚至有一部分，我们一直误认为是汉语，其实是日语。关于此，可以参考前述周太论文和呼和巴特尔的相关论文¹。



照片8 青旗54期第5版 讽刺英美的漫画。左侧和右侧分别是“英国”和“美国”的字样。

5，新闻学研究

可以从新闻史和版面设计的角度研究《青旗》。大量使用绘画、照片等的手法，在识字率很低的当时效果尤为明显。例如，第54期第5版面刊登的一副漫画，讽刺了当时的敌对国美国 and 英国（照片8）；第8版面的图画（照片9）则呼吁蒙古人必须增加人口。类似的绘画很多，特别在每期的最后一版面向儿童的栏目“儿童青旗”里更为明显，可以为相关研究提供很好的素材。



照片9 青旗54期第8版“增加人口，为建设繁荣的亚洲而做贡献”

从蒙文定期刊行物视角的研究国内主要有忒莫勒、S.敖特根巴雅尔、努恩达古拉等，日本主要有广川佐保、内田孝的研究²。

¹ 呼和巴特尔《蒙古语的近代词汇与辞书（二）——蒙文学会翻译<新名字典>（满洲国1941年）——》，《学苑》No.859，昭和女子大学2012-5。

² 广川佐保1997,2007,2016。内田孝最近还新发现了伪满时期的蒙古文杂志（《新发现的“满洲国”时期的蒙古文定期刊行物<蒙文精军>与<铁骑>》，《20世纪前半期蒙古语定期定期刊行物研究》，昭和女子大

6, 文学研究

《青旗》刊发了大量文学作品。其中，曾留学日本、后来成为中国的蒙古民族代表性诗人、文豪赛春噶（纳·赛音朝克图）的作品首先受到了关注，尤其是日本的内田孝的研究比较详细。国内有乌·苏古拉、巴·格日勒图等的先驱性的研究以及后来的永花的博士学位论文。文学视角的研究状况可以参考内田孝2015论文。

7, 殖民统治研究

近几年关于日本殖民统治的研究，在中国坚持以“抗日”、“反日”为前提的立场仍然占据主流。同时，也有部分学者主张，作为学术研究，应该客观全面地认识日本的殖民统治，力争对于历史问题存在分歧的双方达成共识，建设更加友好的国际关系。

《青旗》使用较大版面报道国际形势、伪满国内形势、蒙古各地区的形势、尤其是大力宣传政府的政策、日军在各战场的情况等。体现了殖民主义的特点。

在被殖民地强制推行宗主国的语言，是殖民统治的普遍特点。《青旗》的“日蒙会话”栏目即为施政者的语言政策的一个体现。

有人将蒙古国独立的一个原因归于哲布尊丹巴·呼图克图在宗教上的至上权威。藏传佛教是蒙古人的归属意识的基础，哲布尊丹巴·呼图克图作为藏传佛教的最高领袖，在国家的独立活动中发挥了重要作用。日本在其统治时期，推行藏传佛教（喇嘛教）的改革，相关的论文有广川和牧仁的研究¹。而在推行宗教改革的过程中，尚未发现使用暴力手段强迫僧侣或破坏寺院的记载。

产业改革也是《青旗》报宣传的一个重要内容。开设了“家畜栏”，包括介绍各地的畜牧状况、畜产品的近代加工法、家畜饲养方法的改善、家畜品种的改良、重新认识传统的游牧方法等内容。综合地讲，畜牧可以维持，但是需要改革。

《青旗》是日本对于内蒙古的新闻扩张和侵略的一个环节，是日本统治者的宣传工具，同时，在一定程度上反映了蒙古人的愿望和意见。

学国际文化研究所，2016）。

¹ 广川 1997；牧仁《日本殖民时期东蒙古喇嘛教改革研究》，内蒙古大学硕士学位论文，2014。

8, 构建竖写表音文字数据库的重要性和困难

自2014年以来,日本的大阪大学致力于《青旗》报数据库的构建,并于2017年7月完成了1941年新闻报道的题目索引。索引以蒙古文输入题目并附上拉丁文转写和日译文。此次的尝试,为小语种的竖写表音文字数据库的构建提供了经验。制作过程中,遇到了种种困难,这些问题是小语种的竖写表音文字在IT时代所共同面临的困难和问题。大阪大学的工作,再次反映了构建小语种竖写表音文字数据库的困难,但同时是一项具有特色和重要意义的工作。希望这一工作得以继续。

结语

在“满洲国”时期,处于被殖民统治的东部内蒙古的有志之士和广大民众,努力实现近代启蒙、文化向上、产业改革(畜牧改良)的同时,在殖民体制所允许的范围内,力争最大限度地保护蒙古人的传统和利益。《青旗》反映了为实现这一目标所采取的策略、措施及其过程和成果。

《青旗》不仅包括了东部内蒙古地区的内容,还有不少关于德王政权的报道,并分发到包括德王政权领域在内的内蒙古大部分地区。该报发行时间长、发行量大、通俗易懂,对于整个内蒙古社会产生了非常深远的影响。《青旗》反映了当时内蒙古的整体社会状况,是内蒙古近代史、近代蒙日关系史、近代中日关系史、近代东亚国际关系史等领域研究的重要而独特的史料。

主要参考文献

- 广川佐保1997《1940年代日本对内蒙古的政策与〈青旗〉报》,《日本蒙古学会纪要》第28号。
- 同上2007《满洲国的蒙古语定期刊行物系谱及其发展》,《环日本海研究年报》第14号。
- 同上2016《从内蒙古的视角看喀尔喀蒙古——以〈奉天蒙文报〉为史料——》,《20世纪前半期蒙古语定期刊行物研究》,昭和女子大学国际文化研究所。
- 牧仁2014《日本殖民时期东蒙古喇嘛教改革研究》,内蒙古大学硕士学位论文。
- 娜仁格日勒2012《〈青旗〉所见近代蒙古民族女子教育》,《内蒙古师范大学学报》(教育科学版)第9期。
- 同上2013《〈青旗〉(Köke tuy): 珍贵的近代蒙古民族启蒙思想文献》, *QUAESTIONES MONGOLORUM DISPUTATAE*. Vol.9。
- 同上2015《〈青旗〉报关于成吉思汗庙的记载》,《战前期蒙古文报纸〈青旗〉的数字化及公开的可能性》OUGC BOOKLET Vol.7, 大阪大学。
- 那日苏2017《祈祷蒙古的统一和繁荣——德王与玛尼巴达拉的交往——》,二木博史·娜仁格日勒等主编《内陆亚历史文化研究》No2, 内陆亚历史文化研究会, 东京。
- 内田孝2002《内蒙古诗人赛春噶留学时期的著作》,《日本蒙古学会纪要》第32号。
- 同上2004《大阪外国语大学的蒙古人教师(1922-1950)》,《内陆亚史研究》第34号。
- 同上2008《近代内蒙古的文学活动和表现意识》,大阪大学博士学位论文。
- 同上2015《从内蒙古近现代文学研究视角分析〈青旗〉报——兼及蒙古语定期刊行物研究现状——》,田中仁·堤

一昭编2015《战前期蒙古文报纸<青旗>的数字化及公开的可能性》OUFC BOOKLET Vol.7。

同上2016《新发现的“满洲国”时期的蒙古文定期刊行物<蒙文精军>与<铁骑>》，《20 世纪前半期蒙古语定期刊行物研究》昭和女子大学国际文化研究所。

斯钦巴图 2013《东蒙古殖民地社会与文化的变动（1931-1945）》，内蒙古大学博士学位论文。

田中仁·堤一昭编2015《战前期蒙古文报纸<青旗>的数字化及公开的可能性》OUFC BOOKLET Vol.7，大阪大学。

同上2016《战前期蒙古文报纸<青旗>数据库的构建及公开准备工作》OUFC BOOKLET Vol.9，大阪大学。

忒莫勒编著2010《内蒙古旧报刊考录1905-1949.9》，远方出版社。

张朝克图2016《“满洲国”时期东蒙古的畜牧状况》，内蒙古大学硕士学位论文。

周太平2016《内蒙古地区的<青旗>研究状况—兼论“满洲国”时期近代蒙古语新词汇的研究—》田中仁·堤一昭编2016《战前期蒙古文报纸<青旗>数据库的构建及公开准备工作》OUFC BOOKLET Vol.9。

The Importance of Researches on *the Blue Flag (Köke tuy)* : the Mongolian Newspaper in Manchukuo

Narangerel

概 要

満洲国時代、日本の支配下に入った東部内モンゴルの人々はモンゴル社会の近代的啓蒙、文化の向上、産業の改革（牧畜の改良）を目指す同時に、植民地支配体制の許す範囲内でモンゴルの伝統と民族の利益を最大限に守ろうとした。『フフ・トグ』紙はまさにその目標を実現するために取られたさまざまな政策や措置およびその具体的な過程と成果を反映している。この意味において、『フフ・トグ』紙は当時の内モンゴル全域の社会状況を映し出す史料としての位置づけができ、内モンゴル近代史だけではなく、近代モンゴル・日本関係史、近代日中関係史、近代東アジア国際関係史の研究にも独特な価値を持つ。さらに一步進んで考えると、いわゆる「日本植民地支配の遺産」、そして現今の内モンゴルの実情を考えるうえでもその有する独自の意義を見逃してはならない。

提 要

在“满洲国”时期，处于被殖民统治的东部内蒙古的有志之士和广大民众，努力实现近代启蒙、文化向上、产业改革（畜牧改良）的同时，在殖民体制所允许的范围内，力争最大限度地保护蒙古人的传统和利益。《青旗》反映了为实现这一目标所采取的策略、措施及其过程和成果。《青旗》反映了当时内蒙古的整体社会状况，是内蒙古近代史、近代蒙日关系史、近代中日关系史、近代东亚国际关系史等领域研究的重要而独特的史料。

（担当委員：田中 仁 ＊）

<http://www.law.osaka-u.ac.jp/~c-forum/box2/discussionpaper.htm>

* 大阪大学・法学研究科・教授